

変わらなければならないのは気候ではなく人の心¹

ミョン・ミ(忠清南道李舜臣高校)^{チャンチョンナムドイ・スンジン}

はじめに

先日、ティモシー・モートンの『生態学的生活』を読んだのですが、教師である私にとって特に印象的な一節がありました。彼が講義中に「ピアノの歴史について知っている人はいますか」と軽く質問を投げかけたところ、逆にある学生から質問が返ってきました。「なぜ私がこだわる必要があるのですか」と。

学生時代に真面目だったモートンは、教室で起きていることに気がつかないことなどなかったもので、その言葉はまるで火星人のもののように感じられました。そして、ふと、もっと重要なことに気づきます。「なぜ私、ティモシー・モートンは、ピアノを教えることにそこまでこだわる必要があるのか」²と。

また、「なぜ、私は生態環境の視線で見る歴史の授業をするときに、こだわらなければならないのだろうか」と考えました。生態環境史の授業、こだわらない理由はたくさんあります。このような心持ちを定義した人がいたかは知りませんが、教科の授業はその背景の学問の言説と自分の思想とがあまり一致しなくてもよいのですが、なぜか生態環境史の授業は私の生活との乖離があまりに恥ずかしいように思えます。そして、また、そのテーマが歴史教科の領域ではないという感じもします。何かの資格証で検証されていない知識や考えはいくら勉強しても専門性のない教師のものとなってしまいます。何よりもしばしばついて回る「進度」という幽霊。高校教師の私は、新学期の最初の授業から試験範囲をたずねてくる生徒たちにまだなじみません。

ひとりぐらしなので、すべてを自分で買い、使うのですが、捨てるものが家中を埋め尽くして人そのものがゴミにはないかと思うときがあります。無知を隠すことに躍起になって、数十冊、数百冊の本を買い集めた本棚の墓場のような部屋で、全国歴史教師の会の生態環境史授業の会への参加リンクをクリックしました。オルハン・パムクの小説『新しい人生』の最初の文章「ある日、一冊の本を読んで、私の人生が完全に変わった」のように、その会は教職8年目の私にとって決定的な出会いとなりました。

日帝強占期の公害輸出と気候正義の授業

教師によって違いますが、私のいつもの日帝強占期の授業は、支配と抵抗の二分法で時代ごとの日帝の統治とそれと戦う独立運動、つまり主に政治、政治、経済、制度史、英雄の物語に重点を置いていました。人間社会を取り巻く生態環境に関する内容や視線は念頭にありませんでした。ところが、生態環境史の会でこのテーマである「日帝強占期の公害輸出」に接したのです。韓国史の教科書でも、次のように日帝強占期の興南窒素肥料工場^{フンナム}に言及しています。しかし、植民地工業化政策の一例としてとしてしか見ておらず、そ



興南窒素肥料工場（1942年）日本の野口財閥が1927年に咸鏡南道興南に建てた工場^{ハムギョナムド}で、肥料と火薬を生産していた。日本の植民地工業化政策によって興南のような工業都市がつくられた。

の工場が人、空間、景観、環境に及ぼした影響を考えていませんでした。エウレカ（訳注：アルキメデスが叫んだとされる「わかったぞ・見つけた」というギリシャ語）ではないでしょうか。つづいて、『植民地／帝国のグラウンドゼロ、興南』を引っ張り出して読んでみました。1927年、日本窒素は先住民を追い出し、工場都市興南を建設します。日本窒素代表の野口遵が初代邑長まで務めました。東洋最大の肥料化学工業都市を建設し、資本と行政権を統合・独占していたので、世間では興南を「野口王国」と呼ぶほどでした。さらに、韓雪野の小説『過渡期』がこの時期の興南変化をチャンソンというごくふつうな人間の視線で描いていることを知りました。以前、崔曙海の『脱出記』で間島地域を、李箕永の『故郷』で天安地域の歴史を扱ったことがあり、小説も歴史の授業の助けになることを知っていましたので、授業の導入に使いました。

1) 小説『過渡期』に見る興南

チャンソンは四年ぶりに昔の土地に戻ってきた。戻ってきたというよりも、追われてきた。…しかし、今は全てが変わっていた。山もそうだし、水もそうだ。鉄道の線路が峠を切り開き、チャンリ埠頭には漁船が途絶えた。香ばしい土の匂いのする村がなくなり、刺激的な鉄の匂いを出す工場とレンガ造りの建物がこれ見よがしに軒を連ねている。水車は動かず、汽車がうなり声を上げている。農民は山腹の窪地に追いやられ、土方(労働者)たちが歩き回っている。地面は石炭の粉塵でまっ黒に覆われ、船でにぎやかだった港は波の音だけで寂しい。彼の目には陸も海も一様に死んでいるように見えた。機械の間のレンガ造りの建物の煙突がどんなに騒がしくても、何の意味もないことであった。…

しばらくして、この地の民はまげを切って工場に押し寄せた。しかし、そう簡単に雇われるわけではない。力があって体つきがしっかりしている若者だけが抜擢された。そして、醜い老弱な人はみすぼらしい畑で農作業をしたり、鮎漁をしたりするしかなかった。…チャンソンは運よく工場労働者に選ばれた。まげを結び、脚絆を巻き、シャベルを持ち、コンクリートを練るのに不慣れな人間になった。

韓雪野『過渡期』

短編小説です。朝鮮窒素肥料工場が建設され、小さな農漁村から天地がひっくり返るような変化にみまわれた村、工場労働者に変貌した主人公の姿を表現した部分を抜粋しています。つづいて、興南地方の公害被害を扱った毎日新報、東亜日報の記事を提示して、これらの事実が小説の中のチャンソンの村でおこったことだとしたら、「コンクリートを練るのに不慣れな人」になったチャンソンのその後の人生はどうなったか想像してみようと提案しました。2つの記事以外にも、ネイバーニューズライブラリーで検索すると、日本窒素コンチェルン傘下の朝鮮窒素が吐き出す有毒煙の廃水による住民の被害が多かったという記事がかなり見つかります。

呼吸器疾患、特に肺病患者が続出する原因は、工業都市興南でたちこめる煤煙が原因ではないかと推測される。今年1月から3月末にかけて、管轄区域の死亡者総数117人のうち呼吸器疾患による死亡が38人で、絶対多数に達したと言ってもいいほどである。死亡者の3分の1を占めている。死亡年齢層は、22～23歳から30歳未満が大半を占めるという。

肺結核の原因は工場排煙関係か。興南地方に多数。 毎日新報、1939.4.13

数年前から、興南の朝鮮窒素(肥料株式)会社の工場付近数十里以内の海では、以前は豊富だったナマコ、アユ、ウツボ、アワビなどが姿を消し始めた。これは、朝鮮窒素工場から流れ出る水に多様な生物を死滅させる化学成分が含まれているためだという。

化学工業が集中したが水産業の前途に憂慮、各工場廃水に毒素含有。 東亜日報、1939.2.4.

ここで、小説のタイトルが「過渡期」である理由をたずねて授業の導入を終えます。私もこの授業を準備することで、日帝強占期には『過渡期』というタイトルの小説がいくつかあることを知りました。生徒たちは自分なりの方法でその理由を類推します。もちろん正解はなく、この授業の後に再度質問することができます。

2) 結びついた苦痛（興南と水俣の歴史的-生態的連鎖、公害輸出）

その後、授業は興南と水俣の歴史的-生態学的連鎖による暴力の構造を認識できるように展開していきます。印象深く読んだ『結びついた苦しみ』という本のタイトルをそのまま授業のタイトルにしてみました。興南の「日本窒素」は、有名な水俣病を引き起こした水俣市の「新日本窒素」の前身企業です。生徒たちに、次のような質問を投げかけます。

◎興南に看護師として勤務したことがある三谷さんは、「興南に原因不明の奇病があった。…その奇病は興南病という名前で処理された」と証言したことがある。当時の被害を伝える新聞記事もいくつかあるが、なぜ今、私たちは日帝強占期の興南地域の公害被害について知らないのだろうか。

◎興南の「日本窒素」は、水俣市の「新日本窒素」の前身企業である。両者の間に一世代ほどの時間が経ったが、同じような問題がくり返されたのはなぜだろうか。

水俣病のルポルタージュである石牟礼道子さんの『苦海浄土』の一部を読み聞かせ、「だから、結局、私たちは、このくり返される年月の中で一つに結ばれていたのだ」という言葉の意味を考えさせてみました。

3) 公害輸出(pollution export, 鳳山^{フンサン}とチルボン)

つづいて、もう一つの「結びついた苦しみ」が登場します。日帝の植民地工業化政策が本格化し、^{フアンヘド}黄海道鳳山に建てられた日本浅野セメント傘下の朝鮮浅野セメント工場が、朝鮮に工場法ⁱⁱⁱが適用されないという盲点を利用して防塵施設を設置せず、公害被害をもたらした歴史を提示します。次に、我が国がインドネシアのチルボンに石炭火力発電所を建て、インドネシアの環境規制基準が低いことを利用して低減装置なしで致命的な大気汚染物質を排出している現状を示します。日本窒素、浅野セメントの公害輸出先だった我が国、今は汚染を輸出する我が国の変化の中で持続的にくり返される暴力の構造を考えさせます。この過程で、汚染輸出を検索して他の多くの事例を探させるのもよいでしょう。

先に言及した『植民地／帝国のグラウンドゼロ、興南』では、水俣病を固有名詞と名詞とでそれぞれ解釈し、「植民地/帝国の統治性構造が変わらない限り、名詞としての水俣病は予測不能で増殖するだろう」と主張しています。先進国の公害産業が後進国に移転されたり先進国の公害産業の生産力を後進国出身の移民労働者が担ったりという現象はほぼ構造化されており、このような構造がくり返されるころでは、「水俣病」はやむことはないということです。

4) なぜ世界の半分は息苦しいのか（「気候正義」の討論）

そうです。過去には、韓国は公害輸出の被害者でした。これは、会の先生方が助言して下さったように、植民地近代化論に対抗する確かな事例になります。しかし、今回、私はその方向性よりも、「気候正義」をテーマにした討論授業を企画しました。授業を準備する際にしばしば参照した『歴史を学ぶ人たち（日本の公正な歴史認識を作るために）』に「歴史学は、発展と成功の歴史ではなく、どこで道を誤ったのかその分岐点をあばきだし他の選択肢の可能性を探ること、つまり、よりよい未来を希求する学問」と定義しています。まったく同意します。日帝強占期には公害輸出の被害者でしたが、今では気候の悪役とまで言われるほど「歴史的責任」が大きい私たち。間違った歩みを省みて新しい道とともに考え出そうという気持ちでした。

歴史をふり返ってみると、私たちは非常に巧みに過去の残虐行為を自分たちとは無関係のものにしてきた。何か問題が起こると、いつもどこか遠く離れた別の所の他の誰かのせいにした。しかし、気候危機は私たち、北半球の国々が引き起こしたものである。植民地主義時代、そして、それ以前から進行してきた不平等が生み出した結果である。しかし、気候危機を生み出した責任が最も少ない人々が、この危機のために最も大きな打撃を受けるのである。一方、最も責任のある人々は最少の打撃しか受けない。… 私たちは、損失と被害を補償し、賠償しなければならない。私たちは歴史的な排出量に相応の責任を負わなければならない。汚染を引き起こした者、汚染排出活動で最も大きな利益を得た者が汚染除去にかかる費用を支払わなければならない。これは、歴史的責任が最も大きい私たちに返ってきた、もはや逃れられない巨額の未払いの請求書である。この道徳性に関わるテストを通過できなければ、私たちは他のどのテストも通過できないであろう。

Thunberg, Greta, 『気候の本』、キムヨン社、2023、493～494ページ

いつだったか、生徒たちが「大人たちが壊した世界では、私たちは被害者だ」と憤慨しているのを聞いたことがあります。その時、「悔しさ」という感情が生徒たちの心と行動の変化を引き出すのではないかと思ったのですが、ある本のタイトルのように「いいね」がどのように地球を破壊しているのかも知らない私たちの悔しさが正確な問題理解なのか問い直さなければなりません。

終わりに—くじけない心

「知ったこっちゃない」。このようなぶしつけな言葉を、全国の歴史の先生方が読まれる文章に載せていいのかわかりません。生徒がそれでも最も感情移入しやすいと言われている日帝強占期の授業中にも、「私には関係ない」という感情を全身で表す生徒が多くなります。手のひらの中で自分だけの世界を遊泳し、むしろ現実から遊離している生徒たちです。急変する未来、例えば、人間と機械が共存し巨大な気候危機に直面して人口と資源問題が深刻化する未来で、波にただ黙って合わせるのではなく波の上に乗ることができる力を育てようということが出てきた2022年改訂は教育課程の「行為主体性」を養う教育は、遠まわりにしか感じられません。

以前、「近代と歴史の発展」というテーマで価値垂直線討論授業をしました。週末に、近代の両面性を示す事例と考えをまとめて二つの文章にし、「近代は発展なのか」という質問を投げかけました。0から

10までの垂直線の上に表示された相異なる感情がぶつかり異なる道を想像させる授業でした。しかし、だめでした。近代が発展ではないという生徒はいませんでした。「反論するときは際は携帯電話の返却、反論するときは馬にでも乗っていけ」という反発を受けました。

今年は、世界問題と未来社会という進路選択科目も担当することになりました。生態環境史の勉強会のおかげで、このようなよい機会がめぐってきたと思いました。地球生活者として一人一人の役割を果たそうというオリエンテーションを行い、言葉や考えだけでなく行動したいと思って生徒たちとボランティア団も組織しました。『気候の世界史』の著者ピーター・フランコパンは、「歴史を書くことは、地球史であれ他のどの歴史であれ、『よい歴史』を書くこととはまったく異なる」と言います。生態環境の視点を取り入れた「よい歴史の授業」をすることは、単なる「歴史の授業」をすることとは違うと、私たちも喜んで言いましょう。初めての試みでうまくいかなかった日帝強占期公害輸出の授業の後、私たちの地域である忠清南道^{チュンチョンナムド}地域の長項製錬所^{チエンハン}ivの話聞いてきて、いっしょに話そうという生徒がいました。そんな希望を見て、今日も、目的地は遠くのどこかではなくそこに向かう一步一步だというある詩人の言葉を心に刻んでいます。

『歴史教育』2024年春号、190～197ページ

翻訳：平野昇、2024年6月27日

i 2019年、ユネスコ気候変化報告書題名 (Changing minds, not the climate)

ii ティモシー・モートン『生態学的生活』、キム・テハン訳、エルピ、45～46ページ、太字は原本

iii 1916年9月1日に施行された。同法はしばしば労働者保護の観点から注目されているが、公害規制のための規定が存在した。しかし、植民地朝鮮には適用されなかった。

iv 1936年に忠清南道長項邑に設立された朝鮮製錬株式会社が、解放後に長項製錬所と改名され、金・銅・鉛などを生産する国内唯一の非鉄金属製錬所となった。生産量が増えるとともに人口も急増し、高い煙突は村の自慢となったが、半径4km圏内の土壌から基準値をはるかに超えるヒ素が検出された。2007年には鉛とカドミウムまで検出され、地域のすべての耕作が禁止されることになり住民は移住した。回復に向けた取り組みは、現在も進行中である。